

徳島における歴史津波

村上 仁士*・島田富美男**・細井 由彦***

1. まえがき

太平洋岸に面する高知・徳島両県の沿岸では、有史以来100～150年の間隔で津波被害を受けてきた。高知県については比較的豊富な津波資料がすでに整理されているが、徳島県に対しては必ずしも十分とは言えない。

近年、歴史津波を解析し、かつて津波に襲われた集落の防災対策に役立てようとする研究が積極的に行われるようになってきている。歴史津波の被災記録は、文部省震災予防評議会編の「大日本地震史料」3巻と「日本地震史料」1巻にすでに集録されている。また渡辺偉夫編の「日本被害津波総覧」にもその概要が整理されている。

本論では、上記史料以外にも徳島県下で収集した新たな資料を加え、徳島における歴史津波の挙動の実態を調査することにより今後の津波研究の資料に供することを目的としている。ここでは、1854年の安政南海地震津波までの資料を取り扱うこととし、1946年の南海地震津波については別の機会に報告したい。また、資料の提供という意味からたとえば津波の高さについても古文書に示された値を忠実に書くこととし、石段や寺院の浸水状況より現況に換算可能な場所についてもT.P上の値で示すことをせず、単に資料に書かれた高さをメートル法で換算して記していることをあらかじめことわっておく。

2. 徳島を襲った江戸時代以前の津波

記録に残るわが国最古の津波は天武13年10月14日（684年11月29日）の白鳳地震によるものである。この地震の震源は室戸岬沖であった。この地震により高知市の近郊の田畑が約12kmにわたり海中に没し、このときの津波で貢物を運んでいた船が多数沈没したことが日本書紀に記されている。この地震のマグニチュードMは8.4であり、津波のマグニチュードmは3であったと推定されている。波源の位置（図-1）からしても徳島にも災害があったと思われるがその資料はない。

仁和3年7月30日（887年8月26日）、紀伊半島沖でM 8.6の大地震があり、大津波（ $m=3$ ）が大坂湾一帯を襲った記録が三代実録に記されている。当然徳島も被害をうけているはずであるが、その記述はなされていない。

徳島を襲った津波で記録に残る最古のものは、正平16年6月24日（1361年8月3日）、紀伊半島沖に震源をもつM 8.4（ $m=3$ ）の地震によるものである。この津波により、現在の海部郡由岐町（図-2）で1,700戸の家屋が流失し、60余名が流死したと太平記は伝えている。文化年間の阿波誌に「雪池（由岐池）は東西由岐村間にあり康安元年（正平16年）、地大いに震い海湧き、全村蕩尺す六月十六日より地震十月に至る。地裂けて池となる長さ二百二十歩（約400m）、径百歩（約180m）、太平記を見るに正徳中（1711～1716）四分を以て西村となし、六分を東村とす。風波起こる毎に村民船をここに置く」とあり、現在の大池（図-3）がこれにあた

* 徳島大学工業短期大学部教授

** 阿南工業高等専門学校講師

*** 徳島大学工業短期大学部助教授

るといわれる。この大池の南岸イヤ谷にこの津波の犠牲者の供養碑があり、津波の20年後の康暦2年に建立されたもので、康暦碑(写真-1)と呼ばれている。近年大池から唐代の開元通宝(621)や南宋時代の皇宋元宝(1253)などの古銭が出土し、正平の津波来襲時に埋ったものと郷土史家は判断しているようである。

この津波で渦潮で名高い鳴門の海が干上り、海底がみえたと太平記に記されている。

ついで、永正9年8月4日(1512年9月13日)、海部郡の穴喰(図-4)を襲った津波の記録が「穴喰浦成来旧記」¹⁾に残されていて、それによると穴喰浦で3,700余名が流死し、1,500余名が助かったと伝えられている。当時の城は図-4の旧城と印した場所にあり、集落の中心は現在の正梶の地にあった。この津波で城下町は壊滅し、その後現在愛宕神社のある小山に城を移したといわれている(写真-2)。詳細な旧記の記述から当時の被害状況を知ることができるが、このような大災害を与えた津波にもかかわらず、この地以外の被害記録はみあたらない。武者金吉は「大日本地震資料」のなかで、この津波は風津波(高潮)によるものではないかとコメントしているが、気象研究所監修の「日本高潮史料」にもなく、羽鳥²⁾も1934年の室戸台風ですら3m程度の潮位上昇であったとして、これが高潮とは考えられないと述べている。幻の津波であり、今後他の地域でこの津波に関する資料の発掘が期待される。

3. 慶長の津波

慶長9年12月16日(1605年2月3日)、房総半島南東沖と室戸岬沖に2つの震源をもつM 7.9の地震が起き、それに伴う大津波(m=3)により犬吠岬から九州に至る太平洋沿岸地域に大被害をもたらした。全国の溺死者は5,000余名にのぼり、なかでも被害は四国の太平洋沿岸で最も大きく、高知県の室

戸で400余名、佐喜浜で50余名、徳島県境に近い甲浦で350余名の犠牲者を出している。以下徳島沿岸の被害状況をみよう。

1) 穴喰

穴喰の古文書、田井及一の“震湖記”および穴喰の寺の住職の記録“円頓寺開山住持有慶之旧記”、“慶長九年大變年代書記”、“大日旧記聞書”がこのたび解読された¹⁾。それらによれば「当寺(円頓寺)且中流死人數老若四十三人、大日寺且中二十三人、真福寺且中九人、長福寺且中六十一人、里分寺方の且中も入込み死申し候、自他共惣人数一千五百余人と申し候、あわれなる事を見聞いたし翌十七日ハツ時(午後2時)に下り候て見申す所、城山より西北方一面の人の死骸目も当てられず候、東より北往還道筋へかかり候ても右の通りに候、其の節、久保の在所の内にてても二ヶ所、惣つか(塚)にいたし死人埋め申し候、其の後、地藏石仏あい立て置き候、祇園西手の山ぎわなり」とある。このときの塚の位置は現在の淨福寺(図-4)にある六地藏がそれであるといわれている。

また津波の来襲の折、穴喰浦の泉では2丈(6m)余り水が吹き上げたようである。この津波で、十五端帆(三百石船くらいの廻船)、十七端帆(四百五十石船くらい)の廻船が1.5km内陸の日比原より奥まで流れ込み、正梶井関には小船が打上げられた。潮は水床の沖まで干上る一方、愛宕山の八分目(約20mにあたる)まで潮がきたといわれている。

2) 鞆浦

鞆浦町北町の巨石に慶長津波の碑(写真-3)があり、それによれば「大海三度鳴人々巨驚 拱手処逆浪頻起、其高十丈。来七度、名大塩也、剩男女沈千尋底百余人、為後代言伝」とあり、津波の高さは30m、100余名が流死したと刻まれている。

3) 浅川・牟岐・由岐

この津波で流失した浅川の天神社の鳥居の一部が発掘された(写真-4)。また、幕末の阿波藩の学者、野口年長による海部郡取調廻在録が解読され、そのなかに浅川における慶長津波の記事がみえる。浅川村の項に「此浦は慶長巳前は荒地にて磯ヶ浦の内なりし、磯ヶ浦は千余軒の氏子有しが、慶長九年の震災にことごとく損亡しければ、此荒地を開立浅川浦と名付しと伝う」とある。また天満宮(天神社)の棟札写しの裏書に「人死多合三千人アマリ大アウ海部友ニ人塩町半分ナカレシ也人死メ五百人但大カウー浅川村迄半分ナカレ里伊勢田井、谷マテ入也一、牟岐島ハ東の浜流人ハ不死也一土時甲浦ユキヲカカリ海部之内ヲカキッテ大ニイタムト申斗也」と書かれていることが解読された。意味不明の箇所もあるが、海南町教育委員会委員長岡川公明は、「死者は多く3,000人余、大津波が海部郡の鞆(鞆浦のこと)に入り潮のため町は半分流れた。死者は大体500人ぐらいであった。浅川村迄半分流れた。浅川村の伊勢田川の上流約3kmの井の谷(船が谷のこと)まで潮が入った。牟岐は東の浜は流れたが犠牲者はなかった。高知の甲浦から由岐の間で大きな被害を受けた」という解釈を行っている。この死者3,000人というのはどの範囲をさすか明らかではない。

4. 宝永の津波

慶長の津波の102年後の宝永4年10月4日(1707年10月28日)、紀伊半島沖に震源をもつM8.4の地震が起きた。それは大津波($m=4$)を伴い、伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸および大阪湾、播磨灘、伊予灘や山口県の瀬戸内沿岸を襲った。全国の死者数は5,000名にもものぼっている。なかでも高知県の浦戸湾の湾口部の種崎では700余名、宇佐で400余名、福島で100余名、須崎で300名、久礼で200名が流死するという惨状であった。

徳島でも、この津波により多くの集落が被害を受けたが、残された資料に基づきその様相を示すと次のようになる。

1) 穴喰

前出の「震潮記」によれば、家屋や蔵、漁具などが流失し、11名の犠牲者を出している。願行寺(図-4)の南の畑に拾え帆帆(154石ぐらい)の船が乗り上げ、寺の座上二尺(60cm)余り浸水した。慶長の津波は夜来襲したのに対し、この津波は昼であったので犠牲者は少なかったと記されている。

2) 鞆浦

鞆浦の北町の巨石に慶長の津波の銘文にならべて宝永の津波に対する碑文が刻まれている(写真-3)。それによれば津波の高さは丈余(3m程度)で3回にわたりこの集落を襲ったが死者はなかったことを伝えている。

3) 浅川

この津波の犠牲者の供養のために正徳2年(1712年)に建立された観音堂の地蔵尊の台石に刻まれた銘文によれば、「大海ヨリ高サ三丈(9m)計ノ大汐指込」潮は「浦上村カラフト坂ノ麓迄上リ即刻引汐ニ浦ノ中干光寺ノ堂一字残、有来在家不残一軒モ海底引落、猶又流れ出ル老若男女百四十人余、悉ク溺死仕」とある(写真-5)。これにより干光寺(図-5)以外の神社仏閣、家屋すべて流失したことがわかる。海部郡鞆浦善祢寺(善照寺)の住職の「大地震洪浪見聞筆記」が解読され¹⁾それによれば浅川では170余人が流死したとなっている。

4) 牟岐

八幡神社(図-6)の奉納板額によれば「海原忽騒て洪波怒が如く、浦里を過て仏閣民家七百余宇流れ失せ、老若男女百十人溺れ死す」とあり、700戸余りが流失し、110余名の溺死者を出した。また、杉尾神社(杉

王神社)の石段下およそ一丈四尺(4m)のところまで潮が来たことが伝えられている。

津田屋喜右衛門の「地震津波嘉永録」¹⁾によれば、「当浦(牟岐浦)にては三丈(9m)余とも往古より言い伝えあり」とある。また、前出の「大地震浪浪見聞筆記」では、「牟岐両浦百人余死して是れまた家壺軒もなし」となっている。

5) 木岐・由岐

高知の「谷陵記」に「由岐両浦共亡所、溺死多し」と記されている。木岐の小坂元日堂の記録に「宝永四亥年極月十二月四日四ツ時(午前十時)ニ津波入高サ二丈五尺(7.5m)人家流れ多く死すと承り候処、木岐浦ニ而ハ七人死すよし」と述べられている。

6) 橘・椿泊・富岡

野村家伝来記によれば、「程なく一番津波峯麓は大荒神馬場先迄、二番浪馬場中程迄、夷山(戒山)にて高さ一丈(3m)余、一番浪夷山上へまで通じ」とある。また「下福井、橘浦、答島村より流れ出る家海上に満々たり、流家屋根に人々上りたる泣きさけお声山彦にひびき、数万騎の大敵とときの声より物すごく」とあり、橘湾(図-7)の湾奥部はかなりの被害を受け、湾内に家屋が流失される様相が生々しく描かれている。

「谷陵記」には「徳島土屋敷二百三十軒民屋四百軒地震につぶる。潮入はなし、黒土浦郷(黒津地)共潮入亡所、富岡浦郷小破橋半亡所、泊浦(椿泊)小破、井佐(伊座利)より志和木(志和岐)までは亡所不和」とある。

5. 安政南海地震津波

宝永の津波から147年後の嘉永7年11月5日(1854年12月24日)、前日の遠州灘を震源とするM8.4の地震発生32時間後、全く同じ規模の大地震が紀伊半島沖で発生した。前日の地震や津波に加え、房総半島より九州沿

岸にわたる広い範囲に津波の被害をもたらした。

この地震・津波による被害については全国的にかなり多くの資料が残されている。徳島における被害状況を新しい資料も含めて順次県南部より示してみよう。

1) 穴喰

田井及一の「震潮記」によれば、前日4日の安政東海地震津波の影響が現われ、またこの日からたびたび地震動があったようである。そして、地面が裂け、いたる所で泥水が吹き上げられる砂地盤の液化現象が述べられている。津波は3回押し寄せたようで「最初の潮はあめやはり遅刈迄、二度の潮は正田薬師森より壺丁程下迄、川筋は日比原村より半丁ばかり下迄、北手は鈴ヶ峯麓迄、また二度目潮の引く事、中磯の沖壺丁程先まで只、壺面の白浜に相成り、つづいて三度目の潮来候得ども小さく壺番潮位之事に相済み、それよりつづいて来浪も無く」とある(図-4参照)。穴喰の被害の詳細は次のようになっている。

穴喰浦分

- 総家数271戸、そのうち141戸流失、15戸潰家、20戸同断、80戸浸水、残15戸無難。
- 総人数1,055人
- 流死8人、そのうち男5人、女3人(それぞれの姓名が記されている)
- 土蔵14ヶ所、そのうち2ヶ所流失、8ヶ所浸水、2ヶ所潰込同断、2ヶ所無難
- 総納家72戸、そのうち32戸流出、2戸潰込、2戸同断、5ヶ所流失
- 堂室5ヶ所流失、蛭子堂、住吉社、古目大師堂、浜大師堂、那佐大師堂
- 廻船8隻、そのうち1隻大破(但し200石積)、7隻無難(但し30~300石積まで)
- 総漁船数45隻、そのうち9隻流失、15隻大破、7隻小破、14隻無難
- 竹ヶ島
- 総家数50戸、そのうち2戸流失、1戸潰家、37戸浸水、10戸無難

- 総人数 147人
- 総漁船数 20隻、そのうち5隻流失、2隻大破、4隻小破、9隻無難
那佐村
- 総家数 22戸、そのうち4戸流失、1戸潰家、12戸浸水、5戸無難
- 総人数 97人
古目
- 総人家 3戸流失
金目
- 総人家 3戸、そのうち1戸流失、1戸潰家同断、1戸浸水
- 総人数 20人
久保村
- 総人家 49戸、そのうち4戸潰家、3戸同断、17戸浸水
穴喰浦の津波の高さも次のように記されている。すなわち、

「古目御番所床ニテ一丈六尺五寸（約5m）、同所大師堂前ニテ一丈八尺（5.4m）、那佐大師堂前ニテ一丈五寸（3.2m）、祇園拝殿内庭迄、八幡石段ニツ目迄、愛宕山南手上り口石段ニツ目迄、同所北上上り口無潮、正田葉師森ヨリ一丁ばかり下手迄、古湊之辺ニテ一丈五寸（3.2m）、湊口之辺ニテ二丈三尺余（約7m）、鈴ヶ峯桜ノ本、丁石之辺迄」と書かれている。

さらに図-8のように浸水家屋の詳細図まで震潮記には示されている。

2) 靱浦

靱浦町立岩にある石碑「靱浦海嘯記」(写真-6)によれば、津波は多善寺(図-9)門前まで、海部川沿いでは脇の宮まで潮が来て、潮の高さは一丈二尺(3.6m)に達したが被害はなかった。前出の靱浦の善祿寺の住職による「大地震洪浪見聞筆記」によれば、「汐の高さは常の汐満より一丈一尺五寸(3.5m)、町は高倉多左衛門前まで汐先参りしとなり、当寺の下は座上六~七寸くらいのことなり、これにより当処に一軒も流家なし人々損じな

し」とある。また、これに「那佐三丈(9m)の所もあり二丈(6m)くらいのごときもあり所によりて大いに違う。大那佐など小那佐より込み候汐は二丈くらいのごことに候得ば大那佐は穴喰の方より廻り候汐と小那佐より込み候汐と打合候処は三丈(9m)も上り候と申す事にござ候」とあり、津波は南方から押し寄せてきたので靱浦は乳崎や小島(図-9)の影となり潮が低かったと説明している。

3) 浅川

文久元年(1861年)に千光寺(図-5)に奉納された板額(写真-7)によれば、「一番潮より三番汐までの大荒れ、いわんかたなく、浦村人家土蔵不残流失せり、天満宮、大歳、御崎明神、江音寺、千光寺、東泉寺、門徒庵のみ引残り」とあり、浅川浦の全家屋が流失し、わずかに社寺のみが残ったことが知られる。さらに同板額には「津波の高さ二丈(6m)より所により三丈(9m)余、観音堂石段廿五段(写真-8)、一谷カラウト坂下辺まで、伊勢田は馬頭庵迄、浦はすべり石坂麓まで、三ヶ寺とも坐上四尺(1.2m)余、死人二人」と記されている。

慶応三年(1867年)に建立された天神社境内の碑(写真-9)には、「高サ三丈(9m)計の大汐さし込、其早き事矢を射るが如し、浦上カラウト坂麓迄、いせだ戸や山の神関迄上り、其夜汐さし込事幾度ともしれず天満宮、大年、御崎三社、並に浦三ヶ寺相残り、其余在家流失、村分西ノ奥、東谷人家悉流失なれ共、用心せし故村中怪我人なし」とある。田井及一の「震潮記」には「浅河(浅川)海老か池などは当春御普請おせつけられ候、堤波戸(止)残らず崩れ田地壘面海底に相成り」と記されている。さらに、浅川の被害の状況を次のようにまとめている。

浅川村浦分

- 流家 321戸
- 潰家 3戸
- 流土蔵 16ヶ所

- 死人 2人男
- 流失漁船 38隻
- 疼漁船 10隻
- 流失廻船 1隻
- 疼廻船 2隻
- 流失 高瀬舟 2隻
- もっとも浦中にて相残り候は寺院三ヶ寺
庵ヶヶ処、社ヶヶ処其余沓軒も残らず流失。

鞆浦の善祿寺の住職の手記には「浅川寺三軒当寺の庵已上四軒残り町家沓軒も無し、流失死人二人有り沓人は舟に乗り浪打ち際にて死し、沓人は平素は気違ひにて桶伏せにしながら流失せり、又稲、伊勢田、粟の浦等往還筋残らず流失せり、その余人に損しなし」とある。さらに「浅川式丈四尺（7.2 m）……汐高し浅川などは鹿島（加島）へ当たり候、汐廻り込み寺院三軒ならびに当寺（善祿寺）庵座上五尺（1.5 m）余汐上がり候得ども山路ゆえ汐はやり申さずや残り候、町家は沓軒もなし、所々にて汐尺（しおたけ）違い候」とあり、浅川湾内の流況は1946年の南海地震津波と極似している³⁾

4) 牟岐

牟岐満徳寺（万徳寺）の記録によれば、「薬師堂（図-6）石段下より二ツ目の上迄津波入し跡あり」とある。

津田屋の手記¹⁾によれば、「汐の高さ三丈（9 m）余または山々の麓へ指し込み候、汐先五・六丈（15～18 m）とも相見えし」とあり、「流死の人数式拾余人」と記されている。

「震潮記」には次のような報告がなされている。

西牟岐、中村、内妻共

- 流家 646戸
- 潰家 34戸
- 浸水 84戸
- 流失土蔵 24ヶ所
- 流納屋馬屋共 167戸
- 流失漁船 142隻
- 疼漁船 41隻

- 流失廻船 41隻
- 疼廻船 5隻
- 流失 高瀬船 9隻
- 諸流失網 994反
- 諸疼網 23帖3部
- 社流失 4ヶ所
- 死人 23人 内15人男、8人女

「大地震浪浪見聞筆記」には、「牟岐式丈式尺（6.6 m）」と書かれている。

「阿波藩民政資料（下巻）大地震実録 中財家文書」によれば西牟岐浦では村のすべての家屋175戸が流失し、東牟岐浦では、357戸のうち3戸しか残らないという壊滅的な被害をうけたことが記されている。また、この津波により牟岐に近い中村・川長村・灘村・内妻村でも後述の付表に示すような被害をうけたことが同資料に示されている。

5) 出羽島

牟岐沖の出羽島には、出羽島貞之助が記した津波の記録が残っている。旧11月4日潮が狂い始め、翌5日に「当島家宅大半流失いたし候、大潮の高さは式丈（6 m）余」と述べている。この島では31戸が流失し、25戸が破壊されたが死者はなかった。

6) 木岐

木岐の小坂元日堂の記録によれば、「空大に鳴る其音山も崩るが如く響くなり、其数大鳴小鳴とも三十六度鳴る間もなく津波打来る其大いなる事三丈余（9 m）程なり、家土蔵よりはるかに高し、逃る内早新橋落ちて跡へ逃げのび助る人もあり、又汐にと切られて流れ死す人多し」とある。また「木岐浦二而十一人、田井村に一人、西由岐浦に十六人、東由岐浦に十四人、西野地村に一人、牟岐浦に三十六人死す」となっている。そして、津波は「八幡様（図-10）の上の石段下より三ツ目迄、延命寺の石段にて八凡八歩通りつかる、奥留り八柿の谷前の堤切ニ留りかしや」とあり、以下氏名をあげ流家やその被害を詳細に

記している。

同村の浜名萬喜太郎の記録によると「五日大津波浸入せり其細を示さんに半里程冲合より津波浸入し其高さ水平より高きこと二丈（6m）余、夜り入り数度浸入す、我浦二百二十戸あり其激浪のため崩され残るもの僅に二十戸なり、延命寺、真福寺は皆無事にして村方へ高浪押入る事凡そ十二町即ち今の大師庵迄に至る、死する者老弱老女十人」、「百石以下の商船及漁船共七十艘余、田面へ流れ込悉く破損す」とある。

穴喰の「震潮記」には木岐浦「流家式百拾軒、田井村「流家式拾軒、潰家五軒」となっている。

中財家文書では、木岐浦「総家数203戸、無難7戸、大小破6戸、流失190戸、流死者0人」、田井村「総家数40戸、無難17戸、大小破16戸、流失7戸、流死者0人」であったとされる。

7) 由岐・志和木

西由岐浦では般若寺と光願寺（図-3）が残ったぐらいでその他はほとんど流失した。中財家文書によれば、西由岐浦205戸のうち、199戸が流失、3戸が倒壊、男女16名が流死したと伝えられる。また同文書には「西由岐浦町際浜にて二丈三、四尺（約7m）位之津波海際堤切口にては五尺（1.5m）程も津波に堀れ二抱位之諸木根引に而抜流居申候、潮行留り山詰にては四丈（12m）位之潮打込候跡」とある。西由岐村では40戸のうち3戸が大破し、22戸が全壊、無事であったのは10戸と伝えられる。

「震潮記」には流失家屋は「西由岐浦で204戸、西由岐村で31戸、東由岐浦で121戸、志和岐浦5戸」となっている。

大正3年に建てられた「東由岐浦修堤碑」には長円寺の下まで津波が来襲し、流失家屋は百数十戸、10余戸が残ったと刻まれている。

8) 橋・富岡

中財家文書によれば、橋浦で156戸のうち22戸が流出し、23戸が全壊、111戸が大破あるいは小破し、男1名が流死した旨が記されている。高さ一丈八尺（5.4m）の津波が来襲し、鵠（図-7）で22戸、全村で134戸が流失したという記録もある。この地震と津波により那賀川河口の中島港は大破し、富岡の辰巳新田は地割れができたところもあり、黒津地の南新田が一面海になったと伝えられている。

9) 小松島

小松島ではこの地震時に大火に見舞われ、町並の大部分が消失した。一方、津波で田野、旗山、金磯新田、和田津新田など（図-11）が大きな被害をうけ、田野旗山まで津波が打ち寄せたといわれている。

丈六寺の旧記には、旧暦5日、地震がゆり出すとともに勝浦川の川口に山のような津波が起きたことが書かれている。また津波は勝浦川川口より約5kmの江田の橋まで上荷船を押し上げたくらいと、勝浦郡志（大正12年刊）は述べている。また同誌には当時の体験者の話に安政東海地震の起きた4日、大地震後、夕方に勝浦川の川口では沖合遙かに潮が引き、まもなく二丈五尺（7.5m）余の津波が押し寄せ、その余勢は川口から約6kmはなれた丈六寺の近辺まで来たことが記されている。

しかし、小松島以北では津波よりも地震の被害の記述が各古文書では多くなっている。

10) 徳島・松茂・鳴門

徳島城下ではこの地震により大火に見舞われ、城下で約1,000戸が焼失した。徳島の北隣の松茂村では中喜来、川内の古川で火災が起り、沖島の善集寺では焼けるにまかせたという。現在の吉野川河口から旧吉野川の河口に至る沿岸では浸水被害も多く、豊岡新田（図-11）では堤防が欠壊し、潮が入ったため松林が多く潮枯れし、田畑ではこの潮入り

のため耕作が全くできなくなったことが、豊岡新田名主板野茂兵衛の上申書に残っている。

鳴門市史によれば、津波一丈四・五尺(約4.5 m)の高さで撫養に上陸し、人家塩田の多くが浸水し、多くの船が破損流失した。被害の最も大きかったのは岡崎で、潰家、焼失も多かった。岡崎だけでも船に乗っていて20人の流死があり、高島でも子供1人が溺死したと述べている。

6. あとがき

本論では、徳島の津波に関する古文書をもとに、安政南海地震津波(1854)までの徳島沿岸各地における津波の実態を忠実に整理した。そのため、古文書によって、各地域の被害家屋数や溺死者数が異なる場合もあり、また津波の高さも誇張して記されたものもあえてそのまま記述した。

これまでの記述でわかることは、徳島の津波被害は徳島県海部郡で最も甚大となり、徳島県の椿泊・蒲田岬と和歌山県の日の岬を結ぶ線が紀伊小道のボトル・ネックとなっていて、それより北の沿岸は海部郡ほど津波の被害は大きくない。むしろ津波よりも地震による被害が大きくなっている。

本論で示した陸上における石段などの浸水位の記録資料をもとに、測量を実施すれば徳島県沿岸各地の水位分布を明らかにすることができる。さらに多くの各地域の資料を収集し、徳島における歴史津波の挙動を明らかにするつもりである。

著者らは、昭和21年(1946年)12月21日の南海地震津波の徳島県各地における多くの資料を収集し、一部解析を行っている。これらの比較的新しい資料と歴史津波のそれらと比較しつつ、各津波の特性を明確にしたいと考えている。

なお、本論で述べた歴史津波の被害状況を末尾の付表に示した。

最後に、本研究の古文書の解読は猪井達雄

氏によるものが多く深謝の意を表するとともに、穴喰町、海南町、牟岐町、由岐町教育委員会をはじめ多くの北方史家の協力を得たことを明記し謝意を表わす。

参 考 文 献

- 1) 猪井達雄・澤田健吉・村上仁士：徳島の地震津波—歴史資料から—、徳島市民双書16、徳島市立図書館、235 p. 1982.
- 2) 羽島徳太郎：高知・徳島における慶長・宝永・安政南海道津波の記念碑—1946年南海道津波の挙動との比較—、地震研究所彙報、Vol. 53, pp. 423~445, 1978.
- 3) 村上仁士・島田富美男・細井由彦・見附敬三：徳島県浅川に遡上した1946年南海地震津波の挙動とその危険度の評価に関する研究、自然災害科学、4-2, pp. 12~26, 1985.

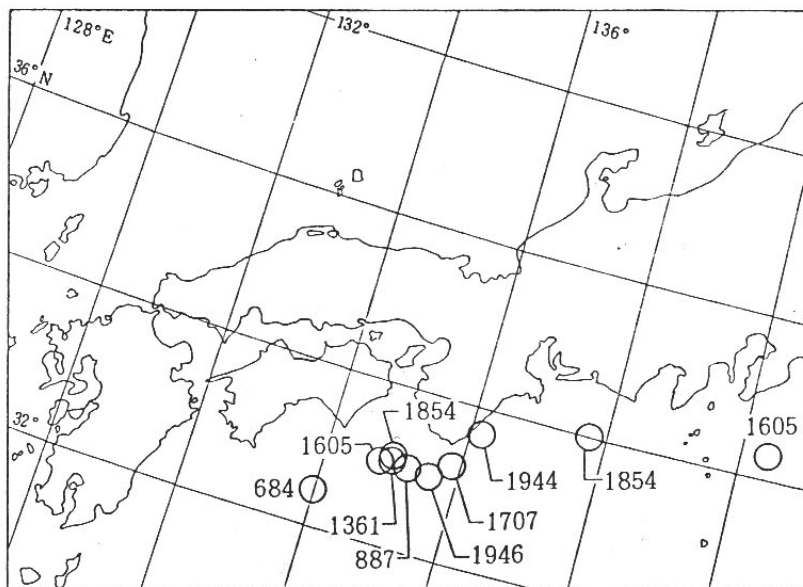


図-1. 徳島を襲った主な津波の地震源の位置

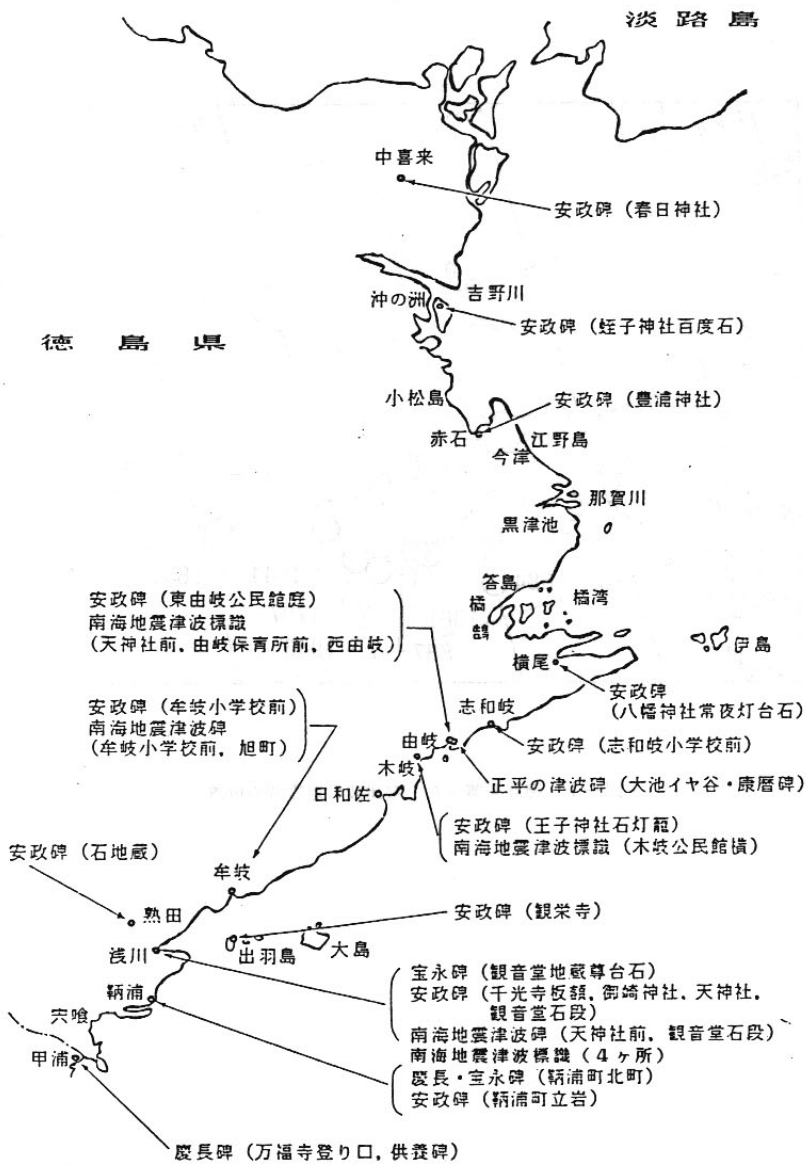


図-2. 徳島における津波の記念碑の位置

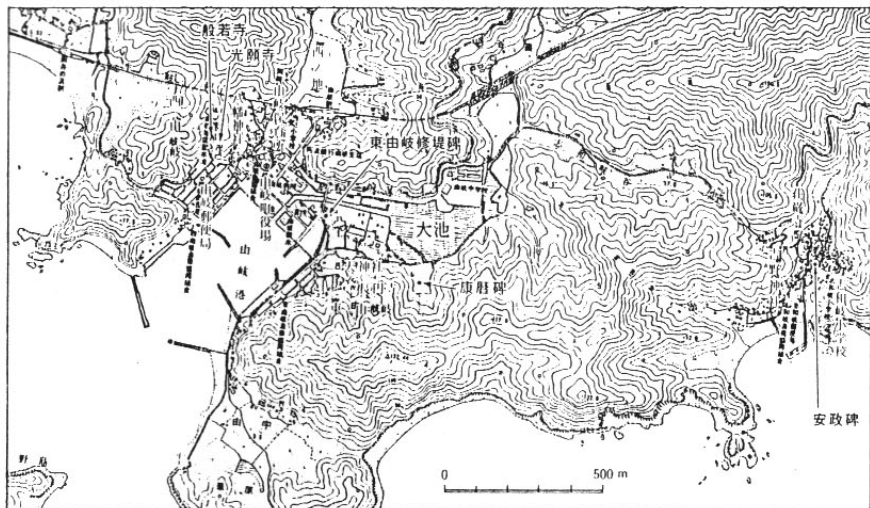


图-3. 由岐・志和木

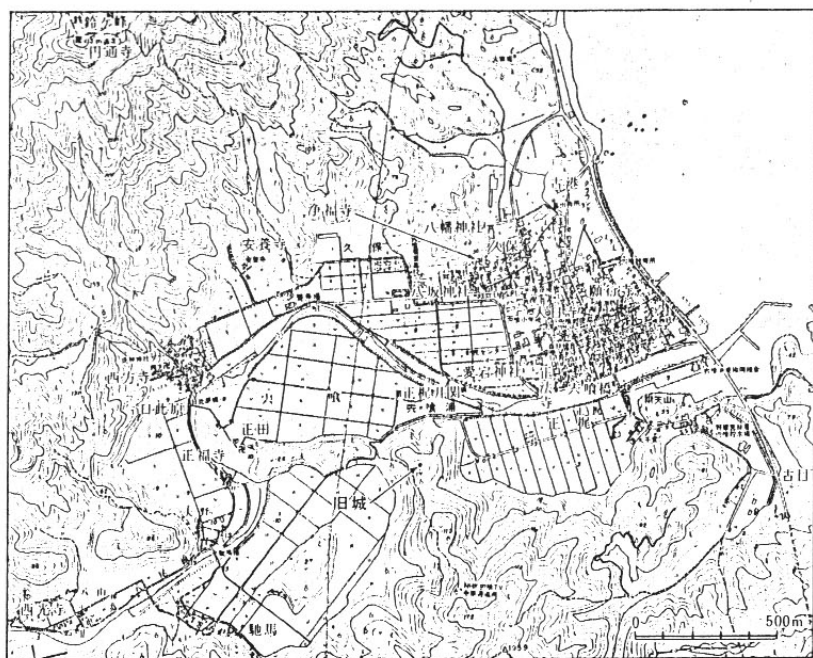


图-4. 穴 喰

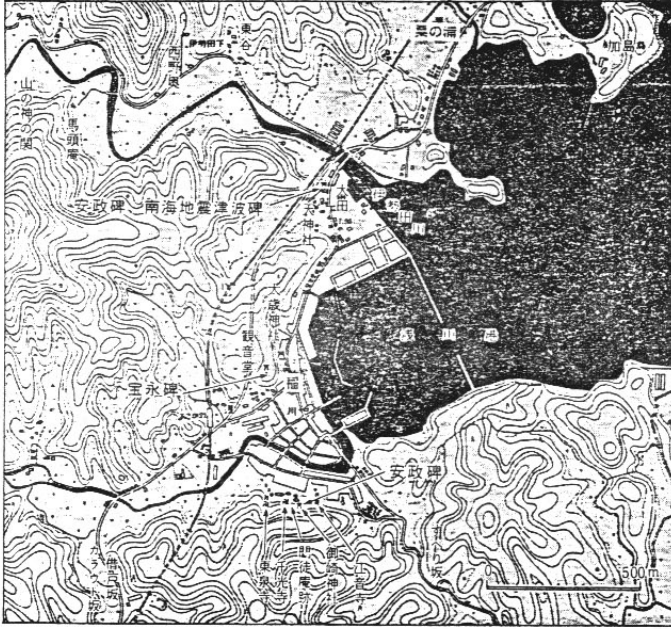


図-5. 浅川

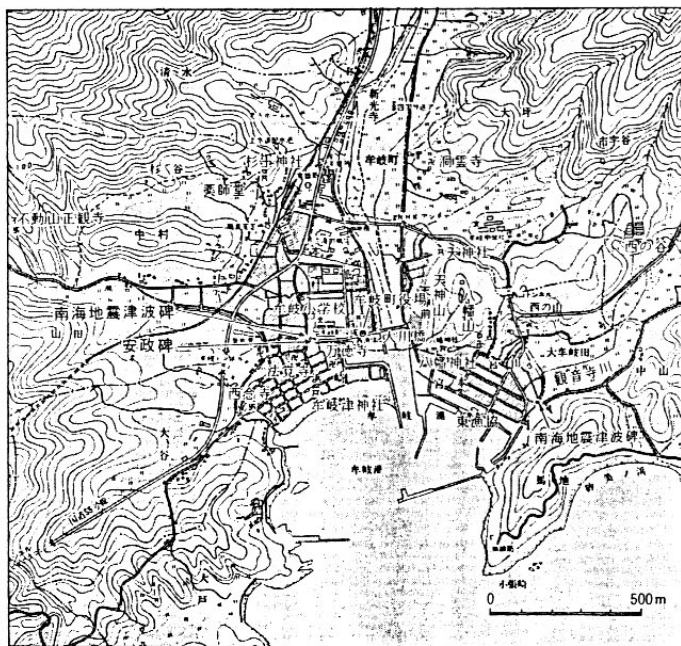


图-6. 车 岐

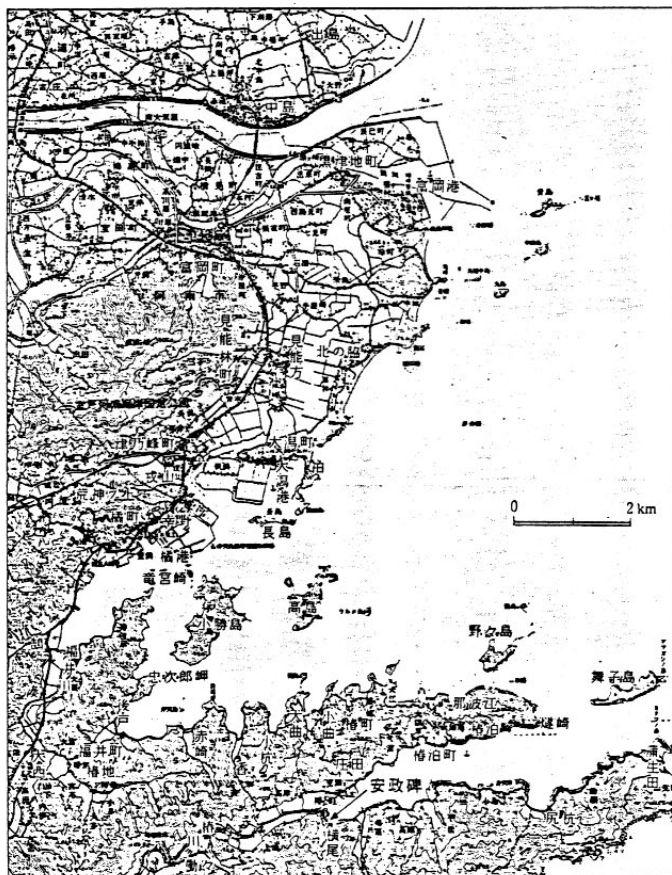


图-7. 橘・富岡

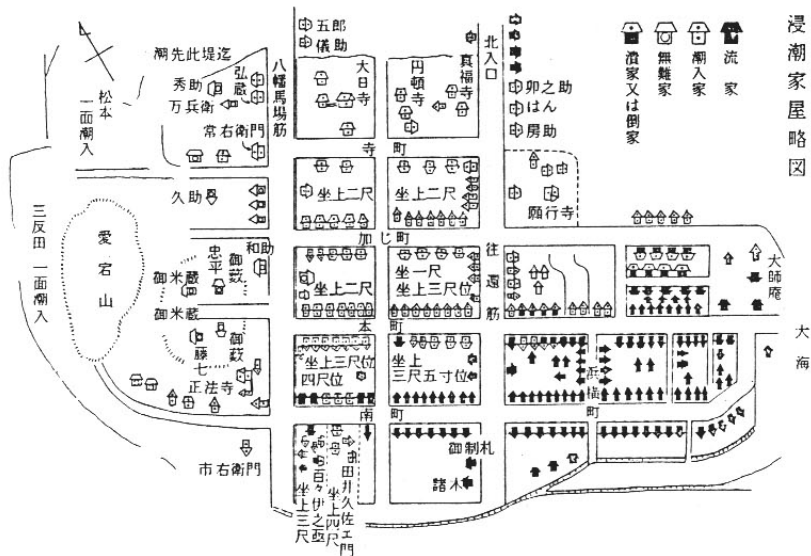


図-8. 安政の津波浸潮家屋略図（穴喰）



图-9. 鞆浦

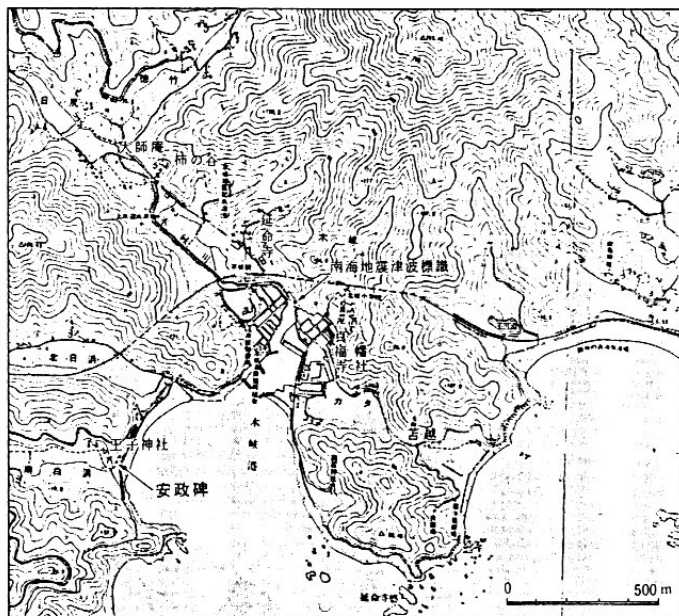


図-10. 木 岐

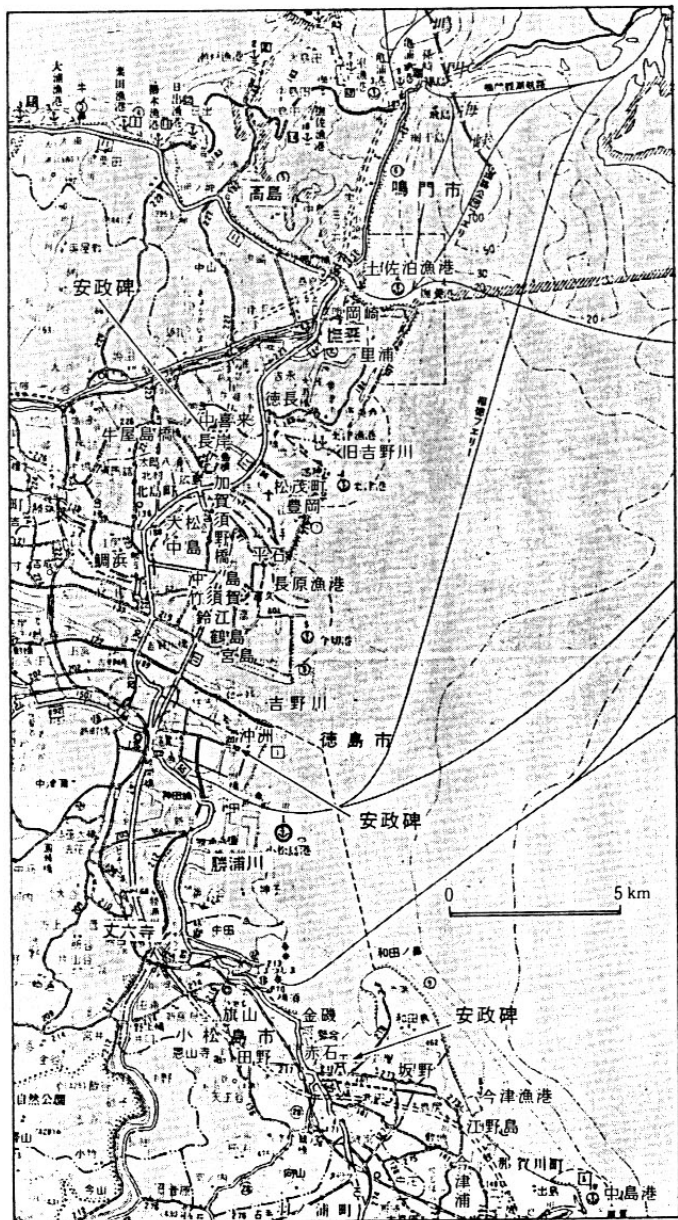


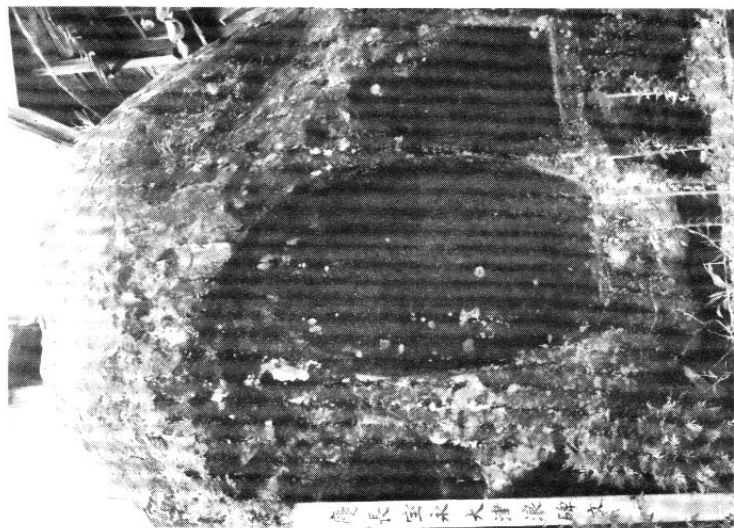
図-11. 小松島・徳島・鳴門



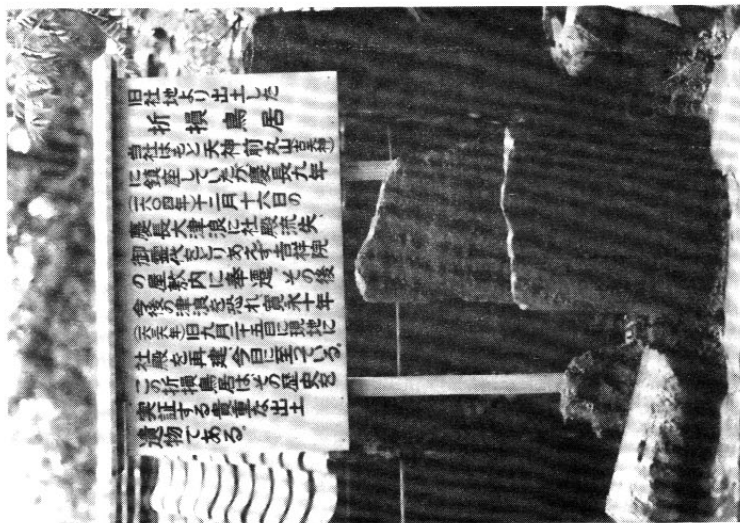
写真-1. 正平の津波碑（康暦の碑）（山岐）



写真-2. 穴喰の旧城跡（A）と愛宕山（B）



写真一3. 慶長（左）・宝永（右）の津波
碑（頼浦）



写真一4. 慶長の津波により流失した
天神社の鳥居の一部（浅川）

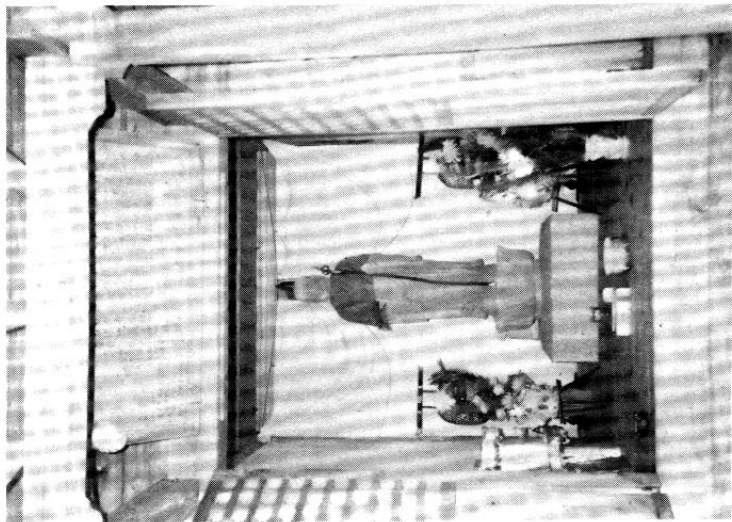


写真-5. 観音堂地蔵尊：台石の銘文が
写真上の板額に書かれている（浅川）

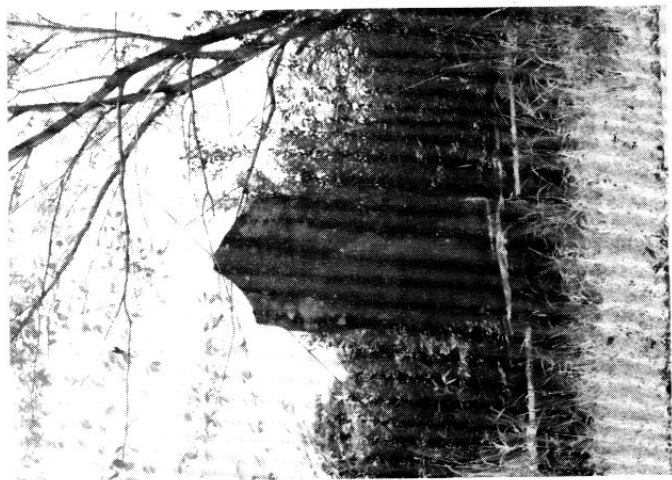


写真-6. 安政の津波碑（梶浦）

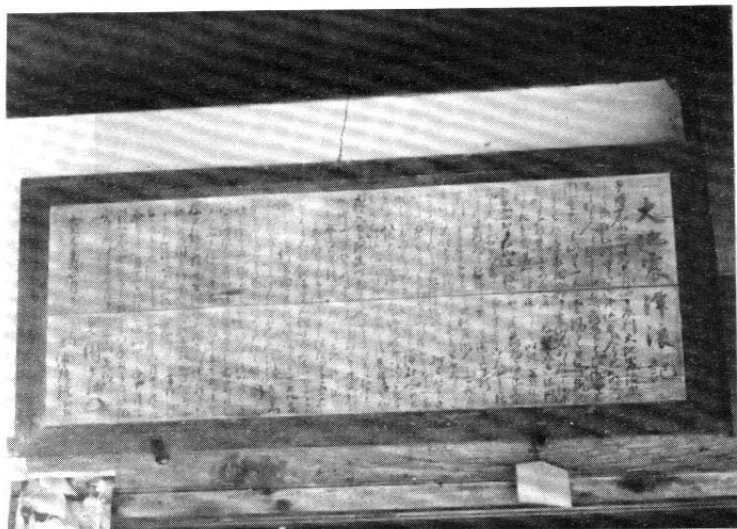


写真-7. 千光寺の板額（浅川）



写真-8. 観音堂石段（浅川）
安政の津波来襲点 25段（A）
南海地震津波来襲点 13段（B）



写真-9. 天神社の安政の津波碑（浅川）

付表-1. 慶長の津波による被害

地区	総家数	流失	流死	津波高	備考
穴喰		全戸	約 1,500	20 m	愛宕山の八分目迄, 300~450 石の帆船が 1.5 km 内陸へ流れ込む
鞆浦		半数	約 100	30 m	津波 7 度来襲
浅川	約 1,000	全戸	約 500 ?		伊勢田川の上流約 3 km まで潮入
牟岐					東の浜流失

付表-2. 宝永の津波による被害

地区	総家数	流失	流死	津波高	備考
穴喰			11	12~15 m	願行寺の座上二尺 (60cm) 浸水, 同寺の南の畑に 150 石以上の船が乗り上げる。高さ二丈, 三丈ところにより四, 五丈 (12~15 m)。
鞆浦			0	3 m	津波 3 回でやむ。
浅川		全戸	約 140 (約 170)	9 m	千光寺のみ残る。カラウト坂麓迄, 流死 140 (観音堂地蔵尊台石), 170 (大地震見聞筆記)。
牟岐		約 700 戸	約 110	9 m	杉尾神社の石段下およそ 4 m のところまで。
木岐			7	7.5 m	
出岐					溺死多し, 両浦亡所。
橘					1 波目大荒神馬場先迄, 2 波目馬場中程迄, 戒山にて高さ一丈 (3 m) 余。
椿泊					小破
黒津地					潮入亡所
富岡					小破, 橋半亡所

付表-3. 安政の津波による被害

地区	総家数	流失	壊家	大小破	潮入	無難	流死	津波高	備考
竹ヶ島	48 (50)	38 (2)	(1)		(37)	10			(総人数 147人):震潮記
穴喰村	500	300	20	180			7		
(穴喰浦)	(271)	(141)	(15)		(80)	(15)	(8)	(7m)	(総人数 1,005人):震潮記
(那佐村)	(22)	(4)	(1)		(12)	(5)		(6~9m)	(総人数 97人):震潮記、津波高は大 地震洪流見聞筆記(以下見聞筆記 と略称)
(古目)	(3)	(3)						(5m)	震潮記
(金目)	(3)	(1)	(1)		(1)				(総人数 20人):震潮記
(久保村)	(49)		(4)	(3)	(17)				震潮記
駒浦		0					0	(3.5m)	見聞筆記
浅川	260 (321)	260 (321)	(3)				1 (2)	(6~9m)	震潮記
内妻	36	13	2			21			
牟岐・中村	129	36	14		71	8	1		男流死
川長村	40	36	3			1			
灘村	66	29				37			
西牟岐浦	175	175					2	(9m)	男流死、震潮記では西牟岐・中村・内妻 合せて流家646戸、潰家34戸、潮入84 戸、流死23、そのうち男15人、女8人
東牟岐浦	357	354			2		26		流死者のうち男3人は他郷人、安政碑に は牟岐39人流死
出羽島浦	68	31	25		3			(6m)	出羽島貞之助記録
日和佐村	207			小20	42	113			潮入42戸は大破
木岐浦	203 (220) (210)	190 (220)		6		7 (20)	(11) (10)	(6m)	小坂元日堂記録:流死11人、浜名家文書 :総戸数220戸、無難わずかに20戸、 流死者10人、震潮記:流失220戸
田井村	40	7 (20)	(5)	16		17	(1)		震潮記:流失20戸、潰家5戸、小坂元日 堂:流死1人
西由岐浦	205	199 (204)	3			3	16	7~12m	震潮記:流失204戸
西由岐村	40	(31)	22	大3		10			震潮記:流失31戸
(東由岐浦)		(121)					14		震潮記:流失121戸、小坂元日堂:流死 14人
(志和木浦)		(5)							震潮記
阿部浦	160		4	大16 小47		97			伊座利は被害なし
下福井村	88	4		54		30			
橋浦	156 (134)	22 (22)	23	111			1	(5.4m)	男流死
加賀須野村									川筋は津波3m来襲
撫養岡崎村							20		船にて20名流死

注: () 以外は阿波藩民政資料(下巻)大地震実録(中財家文書)による。
() 内は備考の文書による。